

【研究ノート】

ヨーロッパの説明社会学， 分析社会学の最近の研究動向

久 慈 利 武

わたしは2013年4月1日付で東北学院大学教養学部を定年退職した。退職記念に大学の附属施設 人間情報学研究所で発行している機関誌『人間情報学研究』2013年発行第18巻に「ドイツ語圏の合理的選択社会学者群像—リンデンベルク，エサー，オプー—」を掲載した。それはオランダ，ドイツを代表する三人の合理的選択理論家の経歴紹介，著作，論文リスト，学問体系，主要フレーム，モデル，三者間の相互の批判応酬をまとめたものである。それから5年が経過した。その三人を含め，それ以外に私の注目する人物など，この10年間の動向を思いつくままに触れてみたい。特にヨーロッパと銘打ったのは，ドイツ語，フランス語などの，英語以外の外国語を読まない研究者にこの情報を伝えたいという願いからである。

1. ドイツの合理的選択理論家に誰がいてどのような研究をしているのか知るのに格好のものがある。ミュンヘン大学社会学教授ロルフ・ジグラーの65歳の誕生日及び退職記念論集として，教え子アンドレアス・ディークマン&トマス・フォスが編集した『社会科学における合理的選択理論（2004）』，ライプチヒ大学社会学名誉教授カール・ディーター・オプの70歳の誕生日祝賀記念論集として，ディークマン，フォス，K. アイヒナー，ピーター・シュミットが編集した『合理的選択：理論的分析と経験的成果（2008）』，マンハイム大学社会学教授ハルトムート・エサーの65歳の誕生日及び退職記念論集として，P. ヒル，F. カルター，Y. コップ，C. クロネベルク，R. シュネルが編集した『ハルトムート・エサーの説明社会学（2009）』である。

祝賀論文集は，友人，同僚，教え子の論文の寄せ集め，各寄稿は互いに遮断されていて，初学者を対象とした入門的論文もあれば，その分野に相当の知識のある者しかついて行けない，読みこなせない専門的な論文が混在しているのが常で，発行部数が少なく抑えられるため，比較的価格が高いのが常である。上記の前二点も他間に漏れない。

エサーの祝賀論文集は異色である。多分エサーが希望したのであろうが，自分の研究テーマ「フレーム選択モデル」「説明社会学」「社会システムと社会分化」「同化と統合」ごとに，

複数の寄稿者を指名し、なるべくエッセーの見解に対する所見、異見を提出してもらおうよう依頼し、それにエッセーが応答するというスタイルをとっている。そこには、単なる形式的な祝賀論文集で終わらせたくない、自分のスキーム、分析に対するライバルの反応を引き出したというエッセーの意図が働いている。しかし、この本を書評したカール・デター・オブは、折角のエッセーの意図も寄稿者がそれに誠実に対応していないと嘆いている。

エッセーも自分の見解に言及しない寄稿にはなんの反応も示していない。さりながら、私の興味を引いたのは、エッセーとともに説明社会学の泰斗で、エッセーと目指すところが共通し、エッセーに極めて大きな影響を与えているフレーミング理論、目標フレームモデルの提唱者リンデンベルクが、これまでエッセーのフレーム選択モデルに言及してこなかったのに初めて見解を披露していることである。しかし残念なことに、リンデンベルクは自分のものとエッセーのそれを詳しく比較して自分の方が優れていると主張する正攻法をとらず、エッセーのそれに対して、批判めいた印象的感想を若干述べるだけで、自分の目標フレームモデルの最新版を延々と開陳してスペースを塞いでいる。エッセーはたまたま、自分がリンデンベルクの他のほとんどを踏襲しているのに、目標フレームスキームだけをなぜ採用しないのか告白するのである。前述のオブは、自身がケルン誌上で、エッセー、クロネベルクのタグとフレーム選択モデルをめぐる論戦を戦わせているだけに、リンデンベルクが闘いを避けていることを非常に残念がっている。

2. 祝賀論文集からハンドブックに話題を転じる。ハンドブックは大御所ではなくその分野領域を得意とする若手に指名執筆させるので、研究動向、研究水準を知るには格好のものである。合理的選択理論では、オランダ、ユトレヒト大学、フローニンゲン大学のスタッフ、院生が執筆した、ラファエル・ヴィテック、トム・スナイダー、ヴィクター・ニー共編の『合理的選択社会調査ハンドブック (2013)』が出版された。このハンドブックは、オランダ・ユトレヒト・フローニンゲン連合大学院を創設期 (1986年) から牽引してきた2007年にフローニンゲン大学を退職したジーグバルト・リンデンベルクの祝賀論文集の機能も兼ねていると思ったが、編者たちはそのことには一言も触れられていない。しかし、リンデンベルク退職間近の2007年11月に、ラッセル・セイジ財団の後援でニューヨークで開催した、ワークショップでの報告がもとになっていることと、スタンフォード大学のカレン・クック、コーネル大学のヴィクター・ニー、ワシントン大学のエドガー・カイザーなどハンドブックには似つかわしくない大物が寄稿していることから、この推測に筆者は自信を持っている。

理論モデルの適用と経験的調査結果の分析、実験結果の分析の接合という連合大学院の趣旨を反映させた成果である。各パート「合理性と意思決定」「ネットワークと不平等」「コミュ

ニティと社会的凝集（犯罪と移民）」「国家と紛争」「市場と組織」をほぼ3人ずつ、16編のうち7編がオランダ、ユトレヒト大学、フローニンゲン大学のスタッフ、院生で、9編が外注（米国5、英国3他）で「国家と紛争」「犯罪と移民の同化」「市場と組織」はほぼ丸投げの観がある。3人の編者の共同執筆になる序論で、4つの次元から合理性（薄い＝強い、厚い＝弱い）、利己心、物質主義、個人主義の4類型は、薄い合理性＝ミクロ経済学理論、均衡理論の完全合理性、利己主義、物質主義、完全個人主義を手本にその要件を緩和したり、拡大する、リアリティを増すタイプを設定する、厚い＝弱い変種に中心がおかれている。「相互行為システム」を観察するための意思決定論、均衡理論の寄稿である。フォーマル化定式はブスケン & スナイダー担当章1編のみで、その他は非フォーマル定式である。

本書を書評したR. バーガー & A. チュテクは、オランダ連合大学院、教員、院生主体のハンドブックである趣旨に気づかずに、オプ、エサー、ディークマンタイプの合理的選択理論、ヘドストロームの社会的メカニズム・アプローチが盛り込まれていないのはどうしたことかと見当違いのコメントをしている。前記のオップ、ジューグラー、エサーの祝賀論文集には、オランダのリンデンベルク、ラオプがそのすべてに寄稿している。

ドイツ、ミュンヘン生まれで、マンハイム大学卒業後、ハーバード大学で博士学位を取得後4年間プリンストン大学に助手でいた、リンデンベルクが1973年にフローニンゲン大学に赴任したのを機に、ユトレヒト大学のウィプラーの呼びかけで「オランダ説明社会学グループ」を立ち上げた。このグループは1982年の国際社会学会メキシコ大会で、説明社会学アドホック・グループを組織し、ドイツのオプ、エサー、アメリカのコールマン、ヘクター、イギリスのピーター・エイベルに呼びかけている。連合大学院は創設期（1986年）から3年ほど毎年、シカゴ大学のジェームズ・コールマンとパリ・ソルボンヌ大学のレイモン・ブードンを学外招聘教授として招いていた。

3. リンデンベルクに触れた序でに、一言。オランダ、ユトレヒト大学のベルナー・ラオプとドイツ・ライプチヒ大学のトマス・フォスがアンドレアス・ディークマンの退職祝賀論文集に寄稿予定稿で「社会学におけるミクロ-マクロモデル コールマン図形の先行者達」と題する興味深い題の論文を起草している。逆台形のコールマン・バスタブ or ボート図形は、コールマンの思いついたものでなく、ハーバードで院生だったリンデンベルクが社会心理学の講義でデヴィッド・マクレランドが、プロテスタントの倫理と達成動機と資本主義の因果図形を、逆台形図形で示したのをコールマンに教えたことをリンデンベルクから直接聞いたと彼らは語っている（Raub/Voss 2016: 14）。実はそれ以前にスペイン社会学雑誌分析社会学特集号で、フィリポ・バーベラ（Barbera 2006: 44）がリンデンベルクに確認を取っている。

また哲学者ブンゲ (Bunge 1996 : 77) はブードン-コールマン図形, ピーター・エイベル (Abell 1996) はコールマン-リンデンバーク図式と呼称している。

前記のラオプ&フォスは、先行者として、オランダ説明社会学・構造的個人主義研究集団 (リンデンベルクとラインハート・ウィプラー)、ドイツ説明社会学・構造的個人主義研究集団 (フンメル&カール・ディーター・オッフ (Hummell/Opp 1968, 1971), フンメル (Hummell 1973), ジーグラ (Ziegler 1972)), フランスのブードン (Boudon 1977, 1979), フィンランドのヘルネス (Hernes 1976) を挙げている。彼らは科学史の鉄則として、科学的発見は最初の発見者は往々にして忘れ去られることが多く、再発見者によって発見が再確認される (例: ステグラの eponymy の法則) こと、コールマン・ボートの場合には、発見者がドイツ語、オランダ語、フランス語で発表され、英文で翻訳されずに埋もれていたためと推察している。ラオプ&フォスがこの論文を執筆したきっかけは後述のオッフの論文 (Opp 2009) が引き金となっているものと思われる。

4. 前記ヨーロッパ社会学の合理的選択研究者群像に追加したかった何人かの人物がいる。2015年に亡くなったパリ・ソルボンヌ大学のレイモン・ブードンもそのひとりである。彼は2007年に『合理性の一般理論』を著している。これは論文集で、彼が合理的選択理論を「期待効用理論流のそれ」ととどめず、認知的、規範的、価値的合理性を含むまで拡張した「一般化した合理的選択理論」を目指したものである。2013年に独訳が出て、仏語原版になかった序論が追加されている。英訳も予告されていたが、独訳が出てからは、英訳の予告も消えてしまった。

序論「社会科学のための合理性理論」(独版固有)

第1部「合理性の一般理論」

「今日の社会学の分裂状況」「合理性の一般理論*」

第2部 合理性の一般理論の応用

「トクヴィルのフランス革命論, アメリカ民主主義論」, 「デュルケムの宗教社会学」,

「ウェーバーの宗教社会学」, 「世界価値観調査の経年変化の分析」「民主主義の制度的変化*」

*人間情報学研究 第19巻(2014年)第20巻(2015年)に翻訳を掲載。

レイモン・ブードンには、全4巻80本の祝賀論文集『社会学の一生』がシェルカウイとハミルトンの編集で2009年に出版されている。編集者序文には、何を記念して出版されたのか記していない。ブードンが2002年にパリ・ソルボンヌ大学を退職しているの、それ

の記念と思われるが，寄稿の進捗，編集の手間などで出版が2008年までずれ込んだものと思われる。「社会理論と科学と認識論」「合理性の一般理論を目指して」「生成メカニズムに関して」「行為と制度と政治のレパートリー」の4部門に分けられている。ブードンの「価値と信念」「方法論」「社会理論」「知識人の役割」「合理性」「相対主義」「科学論」「政治理論」「社会学の今後」の研究分野が網羅されている。世界中の指導的社会学者，社会学者，哲学者の寄稿が集められすべて英文で統一されている。

ブードンを祝賀する論文集はもう一つある。2000年にジャン・バッチェラー，フランソワ・シャゼル，ラミーネ・カネラーネ編『行為とその理由：レイモン・ブードン祝賀論文集』がそれである。21本の寄稿が収録され，仏語17本，独語1本，英語3本である。「歴史学と社会学」「合理的行為の諸次元」「価値の客観性」の3部構成である。出版は2002年でパリ・ソルボンヌ大学退職の2年前である。

シェルカウイはパリ・ソルボンヌ大学の講座と研究所ポストのブードンの後継者であるが，『見えないコード：生成メカニズム論文集（2005）』に，フランス社会学評論「コールマン社会理論の基礎」特集に寄稿した論文が英訳されて収録されている。ウェーバーのプロテスタンティズム論文についてのコールマンの批判に数多くの誤解があると忌憚のない批判を展開している。

シェルカウイは2014年にパリ・ソルボンヌ大学を退職しているが，その講座と研究所ポストを継承したのが，後述のギアンカ・マンツォである。彼は2006年にイタリア・トレント大学から博士学位を取得しているが，パリ・ソルボンヌからも2010年に博士学位を取得している。

5. 他に，私がかねて注目してきた学者に，ミヒヤエル・シュミットがいる。彼は，ハイデルベルク大学で博士学位を取得（1971），アウグスブルク大学から教授資格を取得している（1977）。彼はドイツ・アウグスブルグ大学での教え子で，ミュンヘン・ドイツ国防大学で社会学の同僚であったアンドレア・マオラーと共著『説明社会学：基礎，提唱者，応用領域（2010）』を著した。それは，リンデンベルク，エサーの説明社会学スキーム適用による調整・協力・対立（三種の合意問題）の解明を試みたものであった。副題に応用領域とあるが，連字符社会学（環境社会学，家族社会学，宗教社会学，政治社会学）での適用でなく，（ウルマン-マルガリート，ヤン・エルスターが先駆けて取り組んだ）利害布置状況別の二者間での合意問題への適用である。

シュミットには『メカニズム的説明の論理（2006）』があるが，書題の印象と異なって，「メカニズムに基づいた社会学的説明のロジック」の書ではなく，マートン→コールマン，ブー

ドン→リンデンベルク, エサー系譜の説明社会学スキームの解説書の観がある。ヘドストロームも取りあげられているが、『社会的なものの切開 (2005)』ではなく、スウェドバークとの共編著『社会的メカニズム: 分析的アプローチ (1998)』の紹介に重点が置かれている。

シュミットの共著者マオラーは2010年の共著の後、『社会学における説明項 (2017)』を著している。これは行為に基づいた多水準の説明モデル(説明社会学)とメカニズムを用いた説明モデル(分析社会学)の融合をねらったものである。しかしながら、主要章、合意問題解明の展開に当たる社会秩序の説明はほんの一部のみしか彫琢が提示されていない。

ハンス・アルバート(批判的合理主義), マックス・ウェーバー(方法論的個人主義), スウェドバーク(新経済社会学), グラノヴェッター(社会に埋め込まれたモデル=新制度主義), ハリソン・ホワイト, ロナルド・パート(ネットワークモデル)が取り込まれている。彼女はシュミットがミュンヘン・ドイツ国防大学を退職後、すぐにそこを離れてトリヤー大学に移籍している。マオラーのこの著書は、モデル彫琢の箇所は圧縮されて詰め込みすぎているので、彼女の主張を理解するには、文献に載る彼女の元々の様々な寄稿に直接当たるのを薦める。私にとっては。この書物は、ハンス・アルバートの影響、ケルン大学の研究者グループ、エアランゲン・ニュルンベルグ大学のフシュガス・グループ、ミュンヘン大学の研究者グループ、ハルトムート・エサーのマンハイム大学・研究者グループ、エサーとレナーテ・マインツとのつながり、ドイツ社会学会での説明社会学研究グループの増殖発展など、ドイツ社会学内にいる者なら普通に知っているだろうが、外部の者にとっては耳寄りな情報が満載である*。
*マオラーは1962年生まれで、アウグスブルグ大学で経済学と社会学を修め、1992年にベルリン大学で博士学位を取得、1997年にシュミットのプロモーターで教授資格を取得。『支配と社会秩序: 個人主義理論系譜再構築と展開 (1999)』はその教授資格論文である。筆者は人間情報学研究 第9巻(2004)と第10巻(2005)に第1章序論、第6章「利害と勢力と権利: コールマンの合理主義的な支配理論」第7(最終)章「支配と社会秩序」の翻訳を掲載した。

6. マンハイム大学でエサーの薫陶を受け、エサーにフレーム選択モデルの修正を迫り、提案を全面的に受け入れさせたのがクレメンス・クロネベルクである。彼が2009年に提出した博士論文「社会的行為の説明: 統合理論の基礎と応用」がそれである。彼はそれに先立つこと4年前の、25歳時にドイツ社会学会機関誌に「状況の定義と行為者の多様な合理性: (ハルトムート・エサーのフレーム選択理論に基づく) 一般的行為モデル」を掲載している*。応用編では、「自分の投票が結果にほとんど影響を及ぼさないのに人びとは投票行動になぜ行くのか(コストの低いケース)」「第二次世界大戦下でナチの追跡からユダヤ人を庇った一般人の行動(コストの高いケース)」の経験分析を行っている。

数々の学会賞を受賞し、優秀さを認められ、教授資格請求論文提出を持たずに、クロネベルクは2011年にエサーの後任として、マンハイム大学准教授に就任したが、2年後の2013年にケルン大学に教授として転出している。

*筆者は人間情報学研究 第17巻(2012)に「エサーのフレーム選択モデル」と改題して翻訳を掲載した。

7. オクスフォード大学ヌフィールド校ピーター・ヘドストローム、パリ・ソルボンヌ大学ピエール・デミユールネール、ギアンルカ・マンツォ、イタリア・トリノ大学フィリポ・バーベラ、スペイン・バルセロナ大学ジョセ・アントニオ・ノグエラ、ヘルシンキ大学イリコスキー、ロンドン大学ピーター・アーベルが発起人となって、2008年4月オクスフォード大学ヌフィールド校で「メカニズムと分析社会学」ワークショップを開催し、分析社会学ヨーロッパ・ネットワーク European Network of Analytical Sociology が発足した。

ENAS 第1回大会は2008年10月パリ・ソルボンヌ大学で開かれ、その大会参加者の報告を編集したのが、ピエール・デミユールネール編『分析社会学と社会的メカニズム(2011)』である。2011年6月パリ・ソルボンヌ大学 ENAS 第4回大会報告を編集したのが、ギアンルカ・マンツォ編『分析社会学: 行為とネットワーク(2014)』である。2012年6月ニューヨーク第5回大会以降、分析社会学国際ネットワーク INAS と改称し、2020年に日本・東京で INAS 第13回大会が予定されている。分析社会学の前身は1996年のスウェーデン・ストックホルムで開催されたヘドストロームとスウェドバーク主催「社会的メカニズム 社会理論への分析アプローチ」シンポジウムである。2005年刊行のヘドストロームの『社会的なものの切開』が分析社会学のマニフェスト、2009年刊行のヘドストローム/ピアマン編『分析社会学オクスフォード・ハンドブック』が最初の標準テキストといわれる。

分析社会学は社会学の合理的選択理論、(オランダ、ドイツの)説明社会学と密接なつながりがあるが、それらの限界を乗り越えることを意識し、行為理論による統合にこだわらず、ミクロ-マクロ・リンクによる経験的分析もエージェント・ベースト・シミュレーションを活用する。ヘドストローム/ピアマン編とマンツォ編を比べると、ハンドブックの体裁が整っているのは前者である。「社会的ネジと歯車」「社会的動態」「他の分野とアプローチから見て」と充実した内容をマンツォが、メカニズム概念、行為理論、エージェント・ベースト・モデリングの観点から書評している。一貫性と堅固な理論的、方法論的枠組みで貫かれていて、複雑な形態の方法論的個人主義、広義の合理性概念、社会的ネットワークのダイナミックな概念、統計学と実験の慎重な適用、コンピュータモデルへの強いコミットメントは個々には素晴らしいが、それらの統合が、分析社会学の新奇性に疑いを持つ者を納得させるまでには

至っていないともらしている。マンツォの編著の序論は、それを強く意識した力作であるが、分析社会学の序論というより、説明社会学、構造的個人主義のハンドブックの序論の観がある。マンツォ編に収録されているヘドストロームとイリコススキの寄稿「分析社会学と合理的選択理論」は、ヘドストローム／ピアマンのハンドブックに移したい内容の寄稿である。

8. 前記のアンドレア・マオラーは『分析と批評』メカニズム・アプローチ特集に寄稿した、「説明社会学のスペシャルケースとしての社会的メカニズム (2016)」で、2010年のシュミットとの共著で行った、共通利害、補完的利害、対立利害布置の説明社会学の分析をデフォルト・オプションとして用いて、相互依存し合うエゴ・アルター二者の願望、信念、機会構造のメカニズム・アプローチのタームで分析し直す。英文で執筆することのなかったマオラーが英文で書き下ろしている。ヘドストロームの DBO スキームを使って、説明社会学の分析結果を翻訳することで、両アプローチの対話のきっかけを探っている意欲的作品である。

前記のクレメンス・クロネベルクは「メカニズム・トークとメカニズム・カルトの間 (2014)」で、メカニズム・アプローチの基底にあるアイデアが説明社会学系譜のコア成分であるのに、両者がそれに気づかないで敵対しているのは、前者が後者にないものに新しい力点を置いているからだ、という見地から、説明社会学側がこだわりを捨て、メカニズム・アプローチから積極的に摂取することを提案する。法則定立的説明、行為理論による説明にこだわる、合理性と情報に関して強い仮定、交換モデルとゲーム理論の複雑な社会的相互行為の均衡、ゲームの解に力点を置く、コールマンに代表される説明社会学に対して、行為理論に力点を置かない、強い仮定を立てないでシミュレーションでメカニズムに基づく説明を行うことが可能と主張する、理論モデルよりも経験的リサーチの解説に比重を置くシェリングに代表されるメカニズム・アプローチ。DBO スキームのヘドストロームよりも、行為理論にこだわらない、マンツォーに傾斜するクロネベルクがここにいる。

メカニズム・カルトとは、正しいメカニズム・トークとはいえないエセ・メカニズム論者を指して言っている。

9. ノーマン・ブラウン『ジェームズ・コールマンのアクチュアリティ (2014)』は、社会科学の様々な領域で新機軸を打ち立てた人物の多面的な業績に鳥瞰を与える『アクチュアリティ』シリーズの一卷で 2014 年に刊行された。ノーマン・ブラウンは本書の完成直前の 2013 年に 53 歳で亡くなったために、ミュンヘン大学出身で、生前親交のあった、ゲーム理論を含む合理的選択理論と専門に近い、ライプチヒ大学のトマス・フォスの手を借りて出版にこぎつけたものである。ノーマン・ブラウンはドイツ・ニュルンベルク・エアランゲン大

学でディプロマを修了した後、1988～1992年シカゴ大学でジェームズ・コールマンの線形行為モデル展開を図った著作『社会に埋め込まれた交換』で学位を取得、1992～1999年スイス・ベルンにある連邦工科大学（ETH）で教授資格研究に従事し、教授資格を取得した後ロルフ・ジグラーの後任として2000年にミュンヘン大学に招聘された。

本書の3分の2を占める第二部「主要業績と内容」欄だが、コールマンの名著『社会理論の基礎』を解説した「科学観と方法論」「行為と行為システムの探求」「団体行為者と近代社会の分析」「数理モデル」で書物全体の半分を占めている。主要業績では計量的社会調査（初期経験的考察、コールマン・レポートと論争、後期の学校教育研究）、『集合行為の数学』『新薬の普及』など網羅されている。

本書の第一部「人生とコンテクスト」では、じかに影響を与えた人物として、ラザースフェルド、マートン、ベッカー、書物を通じて思想的に影響を与えたものとして、スコットランド道徳哲学、ハイエクのリベラリズム、ポッパーの科学理論が挙がっている。しかし第一部はそれぞれの学説の解説に終始し、コールマンのどのようなところに影響を与えているかは第二部の当該箇所では触れている。第三部「影響と展開」では、経験的教育調査、社会的ネットワークと社会関係資本、合理的選択社会学の3分野が取りあげられているが、紙幅が少なく駆け足で終わっているのが残念である。

学習の便宜に、コールマンの『社会理論の基礎』についての二次的文献精選と雑誌の特集シンポジウム題が載っていることから、読者対象として学部生、大学院生に定位していることが窺われる。コンパクトで、バランスがとれており、ドイツ語を読めない読者に知られていないのが残念である。

10. 筆者は2011年8月本誌第159号にカール・ディーター・オプが、ドイツ社会学会機関誌『社会学年報』第38巻1号（2009年）掲載の「社会学の個人主義説明プログラム：その発展、現状、問題点」を訳出掲載した。その個人的経歴回顧（ケルン大学時代）を除く部分は、英文で『数理社会学雑誌』第35巻1号（2011年）に「マイクロ-マクロ連関をモデル定式化する」という題で掲載している。この2論文は、彼の『個人主義社会科学（1979）』をその後の30年間の彼及びアプローチ全体の研究進展をふまえて書き換えたものであったといえる。個人主義的説明プログラムの骨子、それに浴びせられる批判内容、批判に対するプログラムの擁護という構成は『個人主義社会科学』と同じであるが、この30年の間に個人主義説明プログラムは、マクロ-マイクロ-マクロ説明モデル（マクロ次元とマイクロ次元の二水準説明モデル）と名称を改めている。

オップは前記『社会学年報』掲載論文で、ハンス・ヨハヒム・フンメルと自身の共著『社

社会学の心理学への還元可能性(1971)』をオランダ説明社会学グループ、フランスのレイモン・ブードン、アメリカ合衆国のジェームズ・コールマンのマクロ-ミクロ-マクロ説明モデルの先駆であると強調している。しかし彼の強弁にもかかわらず、そこで彼らが行っている、マクロ命題の独立変数とミクロ命題の独立変数のリンクは、定義による連結のみで、架橋問題の解決とは到底いえないし、マクロ命題の従属変数とミクロ命題の従属変数のリンクは、定義による連結のほかにコーディネーション・ルールによる経験的還元を若干行っているものの、集計問題の解決にはほど遠いと言わざるを得ないものだった。

オップは前記『社会学年報(2009)』掲載論文で積み残した、集合属性(マクロ変数)が個人属性(ミクロ変数の集計)によって構築されるかどうか、構築されるとしたらどのようにして為されるか」という宿題に着手する。『ケルン社会学・社会心理学年誌』特別号「社会的コンテクストと社会的メカニズム」特集寄稿論文「ミクロ-マクロ説明における集計問題(2014)」がそれである。ミクロからマクロへの関連が論理的それである分析的集計とミクロからマクロへの関連が経験的関連である経験的集計という二種類の集計が詳細に分析される。それから、個人主義的に再構成されることができない集合属性であるグローバルな属性がはたして存在するのか、個人行為が意図されたものか意図されなかったものかでミクロ・マクロ説明の構造が異なるのか、が検討される。最後に社会的実在の存在論構造が個人実在と極めて異質なので還元(= deaggregation)を閉め出す創発性概念を持ちだして、個人主義プログラムの集計可能性に疑問を投じるゲルト・アルバートの見解に反論する。そんなに遠くない将来、オップはこの二本の他、狭義の合理的選択理論を批判し、ワイドなそれを擁護した既発表論文、さらに自分と方向の異なる他のワイド版合理的選択理論を批判している既発表論文を集めて、1971年、1979年著作の改訂版を出版しそうな予感がする。

文献一覧

- Diekman, A./T. Voss** (Hrsg.) 2004 *Rationale-Choice-Theorie in den Sozialwissenschaften. Anwendungen und Probleme.* München: Oldenbourg Verlag.
- Diekman, A./K. Eichner/P. Schmidt/T. Voss** (Hrsg.) 2008 *Rational-Choice: Theoretische Analysen und Empirische Resulte.* Wiesbaden: VS Verlag.
- Hill, P./F. Kalter/J. Kopp/C. Kroneberg/R. Schnell** (Hrsg.) 2009 *Hartmut Essers Erklärende Soziologie. Kontroversen und Perspektiven.* Frankfurt: Campus.
- Opp, K.-D.** 2011 “Review of Hill et al (Hrsg.) 2009” *Kölner Zeitschrift* 63(2): 321-323.
- Wittek, R./T. Snijders/V. Nee** (eds.) 2013 *The Handbook of Rational Choice Social Research.* Stanford: Stanford Univ. Press.
- Berger, R./A. Tutic** 2014 “Review of Wittek et al. (eds.) 2013” *Soziologische Revue* 37: 518-521.
- Raub, W./T. Voss** 2017 “Micro-Macro Models in Sociology: Antecedents of Coleman’s Diagram”

- B. Jann/W. Przepiorka (eds.) *Social Dilemmas, Institutions and the Evolution of Cooperation. Festschrift for Andreas Diekmann*. Berlin : De Gruyter.
- Barbera, F.** 2006 “A Star is Born? The Authors, Principles and Objectives of Analytical Sociology” *Revista de Sociologica Papers* 80 : 31-50.
- Stigler, S.M.** 1999 “Stigler’s Law of Eponymy.” *Statistics on the Table*. Cambridge, MA : Harvard Univ. Press. pp. 277-290.
- Bunge, M.** 1996 *Finding Philosophy in Social Science*. Yale Univ. Press.
- Abell, P.** 1996 “Sociological theory and rational choice theory.” B.S. Turner (ed.) *The Blackwell Companion to Social Theory*. pp. 223-244.
- Boudon, R.** [2007] *Essai sur la theorie generale de la rationalite. Action sociale et sens commun*. Paris : Presses Universitaire de France.
- 2013 *Beitrag zur allgemeine Theorie der Rationalität*. Tübingen : Mohr Siebeck.
- Cherkaoui, M./P. Hammilton** (Eds.) 2009 *A Life in Sociology. Essay in Honour of Raymond Boudon*. 3vols. Oxford : Bardwell Press.
- Baechler, J./F. Chazel/R. Kamrane** (Eds.) 2000 *L’acteur et ses raisons : Melanges en l’honneur de Raymond Boudon*. Paris : Presses Universitaire de France.
- Cherkaoui, M.** 2003 “Les transitions micro-macro : Limits de la theorie du choix rational dans les Foundations of social theory.” *Revue francaise de sociologie* 44(2) : 231-254.
- 2005 “Micro-Macro Transitions : Limits of rational choice theory in James Coleman’s Foundations of Social Theory.” in Cherkaoui, M. *Invisible Codes*. Oxford : Bardwell Press. pp. 59-86.
- Maurer, A./M. Schmid** 2010 *Erklärende Soziologie. Grundlagen, Vertreter und Anwendungsfelder eines soziologischen Forschungsprogramms*. Wiesbaden : VS Verlag.
- Schmid, M.** 2006 *Die Logik mechanismischer Erklärungen*. Wiesbaden : VS Verlag.
- Maurer, A.** 2017 *Erklären in der Soziologie. Geschichte und Anspruch eines Forschungsprogramme*. Wiesbaden : Springer.
- 1999 *Herrschaft und Soziale Ordnung : Kritische Rekonstruktion und Weiterführung der Individualischen Theorietradition*. Westdeutscher Verlag.
- Hedstrom, P./P. Bearman** (eds.) 2009 *The Oxford Handbook of Analytical Sociology*. Oxford Univ. Press.
- Manzo, G.** (ed.) 2014 *Analytical Sociology. Actions and Networks*. John Wiley & Sons.
- Manzo, G.** 2011 “Review of Hedstrom/Bearman (eds.) 2009” *European Sociological Review* 27 (6) : 829-835.
- Demuneure, P.** (ed) 2011 *Analytical Sociology and Social Mechanism*. Cambridge Univ. Press.
- Maurer, A.** 2016 “Social Mechanism as a special case of explanatory sociology. Toward systemtization and expansion of explanation based of mechanism in sociology.” *Analyse & Kritik* 38 (1) : 31-52.
- Kalter, F./C. Kroneberg** 2014 “Between mechanism talk and mechanism cult. a new emphasis in explanatory sociology and empirical research” *Sonderheft der Kölner Zeitschrift. 54 Soziale Kontexte und Soziale Mechanismus*. ss. 91-115.
- Kroneberg, C.** 2011 *Die Erklärung Sozialen Handelns. Grundlagen und Anwendung einer integrativen Theorie*. Wiesbaden : VS Verlag.
- Braun, N./T. Voss** 2014 *Zur Aktualite von James S. Coleman*. Wiesbaden : Springer.

Opp, K-D. 2009 “Das individualistische Erklärungsprogram in der Soziologie. Entwicklung, Stand und Probleme” *Zeitschrift für Soziologie* 38(1) : 26-47.

2011 “Modeling micro-macro relationships. problems and solutions” *Journal of Mathematical Sociology* 35(1) : 209-234.

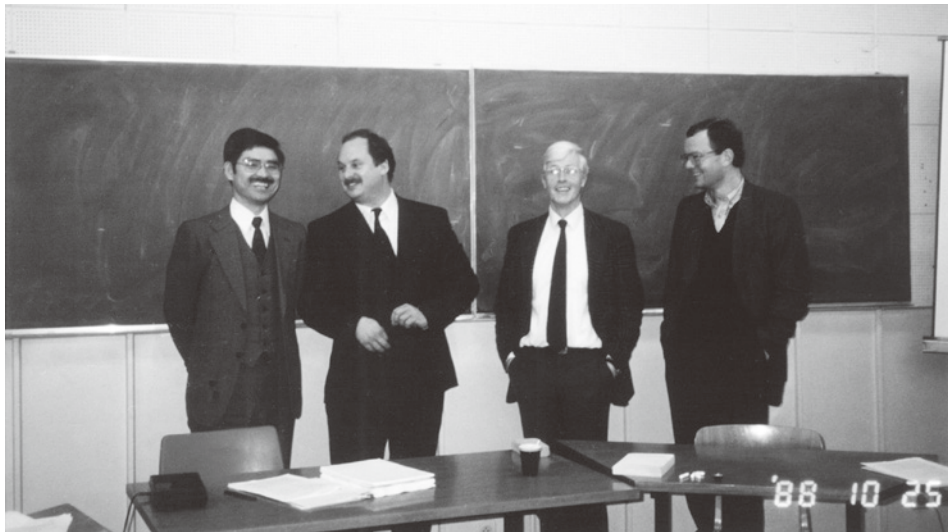
2014 “Die Aggregation Probleme in micro-macro Explanation” *Sonderheft der Kölner Zeitschrift. 54 Soziale Kontexte und Soziale Mechanismus.* ss. 155-188.



ライプチヒ大学 オブ教授研究室 '98.9.24



ライプチヒ大学 フォス教授研究室 '98.9.29



フローニンゲン大学 タツツェラー, リンデンベルク, ラオブ '88.10.25